

平成27年度
重要文化財公開
首里城京の内跡出土品展

発見！首里城の食といのり



沖縄県立埋蔵文化財センター

2016年2月23日(火) ▶ 5月15日(日)



目 次

ごあいさつ	1
首里城「京の内」とは	2
～発見！首里城の食といのり～ 展示概要	3
首里城にみえる食生活	4
首里城で食べられていたのは！	5
コラム1 糞石の出土	7
首里城を彩るうつわたち	8
コラム2 酒と茶に関する陶磁器 11 / コラム3 おもてなし料理メニュー 12 /	
コラム4 国王の食事	13
いのり～祭祀に込めた想い～	14
「いのり」に使われていたのは	14
コラム5 文献や発掘調査からみえる首里城の「いのり」 16 / コラム6 眼鏡鏡 16	
首里城京の内関連年表	17
重要文化財指定基準 / 重要文化財指定の名称と指定理由	18
重要文化財首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧	19
引用・参考文献	20

【凡 例】

1. 本図録は、重要文化財公開「首里城京の内跡出土品展 ～発見！首里城の食といのり～」（開催期間：平成28年2月23日から5月15日）の展示を補完するものとして編集・作成しました。
2. 企画および図録原稿執筆は、金城貴子・仲座久宜・新垣力が担当しました。
3. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行）者の承諾を得ずとも、本図録を複製して利用できます。なお、利用にあたっては出展を明記してください。
4. 調査報告書に記載されている資料名と本図録に記載されている資料名が一部異なるものがあります。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものです。

ごあいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」518点を所蔵しております。これらは、平成6（1994）～9年度（1997）までの4年間実施された首里城京の内跡発掘調査において、倉庫跡（1459年火災で焼失）より出土したもののです。

これらの陶磁器は、14世紀中頃～15世紀中頃の中国、東南アジア、日本で生産されたもので、かつて中華貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを示す貴重な資料です。なかでも、「元青花八宝文大合子」や「紅釉水注」などは世界的にみても稀少であることがわかり、琉球国の歴史上意義深く、かつ学術的にも価値の高いものとして、共伴出土した金属製品やガラス玉とともに、平成12（2000）年6月27日付で、国の重要文化財（考古資料）に指定されました。

「靈力のある聖域」という意味を有する京の内跡は、琉球国王の即位式などの王府の特別な祭祀や儀式などを催す祭場であり、一括出土したこれらの資料はその催しなどに供されたことが考えられます。あるいは、中国から来琉した冊封使を歓待する宴などで供されたかもしれません。

当センターでは、これらの貴重な文化財を多くの皆様にご観覧いただけるよう、平成15（2003）年度より毎年企画展を開催してきました。今回の展示では、「食」と「いのり」に焦点を当て、最近の首里城跡の発掘調査成果を盛り込みながら、当時の歴史をたどっていきます。

この機会に、重要文化財「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 附 一、金属製品、一、ガラス玉」に対する皆様のご理解が深まるだけでなく、大交易時代で栄えた琉球王国の王城としての「首里城」の再発見の機会となり、さらに、本県文化財の魅力や価値に興味を持つきっかけともなれば幸いです。

平成28年2月23日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 下地 英輝

首里城「京の内」とは

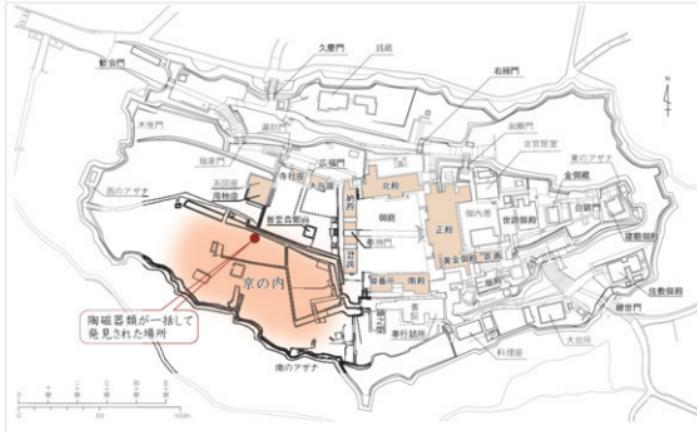
首里城内は、政を司る正殿一帯と、国王のプライベート空間である御内原、聖城空間である京の内に大きく分けることができます。京の内は、首里城内の南西側を占める面積約5,000m²の区画を指します。

琉球王国の正史、『中山世鑑』に記されている琉球の創世神話によると、天上に住む天帝が琉球の創世神アマミクに指示し、國頭：戻安の尹麻森から最良の聖地を求めながら南下しつゝ、今帰仁カナヒヤップ、知念森、薩場獄、藪草浦の原、玉城アマツブ、久高コバウ森を巡り、そして首里城の首里森グスク、真玉森グスクの御嶽を創設するとともに、琉球の島々をつくらせます。

京の内は、アミクが最後に降り立った場所とされ、琉球最高の聖域として認めた場所なのです。そのため、京の内の「京」は、靈力（セジ・シジ）と同義とされています。歴代の国王は、この最適の地に造った首里城を行政と祭祀の中心としました。

王女の神女・女官関係の文書がまとめられた『女官御双紙』には、首里城内に10箇所の御嶽があるとされています。これらは城内の東西南北、南東、南西、北東、北西のほか、上下に配置されており、ありとあらゆる方向の守りとしたことが考えられています。これらの御嶽において、祭祀を司る多くの神女たちは、その靈力により国王が末永く優れた存在として長寿が得られるよう祈りました。この様子は、「おもろさうし」の中でうたわれています。

このような背景から、首里城の中でも特別な空間であった京の内跡から出土した遺物の数々は、城内で執り行われた祭祀に用いられた可能性を示しているのです。



首里城平面図

～発見！首里城の食といのり～

展示概要

発掘調査により首里城京の内跡からは、膨大な量に及ぶ陶磁器のほか、金属製品やガラス玉等の遺物が出土しています。これらの遺物は、食膳をはじめとして、建物や武具、儀式や祭祀など、様々な用途で用いられたと考えられます。その中から今回は、「食」と「いのり」に注目しました。

当時の人々はどのような器を使って、どのようなものを見ていていたのでしょうか。また、どのような道具を使って、いのりを行っていたのでしょうか。

展示では、首里城京の内跡から出土した遺物を中心に、その他首里城内から出土した資料も合わせ、発掘調査成果から見える当時の「食」と「いのり」を紹介するとともに、自然科学分析の成果からも当時の生活に迫ります。

これらの展示を通して、当時を生きた人々の暮らしや、さまざまな思いの一端を感じていただけたらと思います。



首里城京の内跡全景



京の内跡出土陶磁器

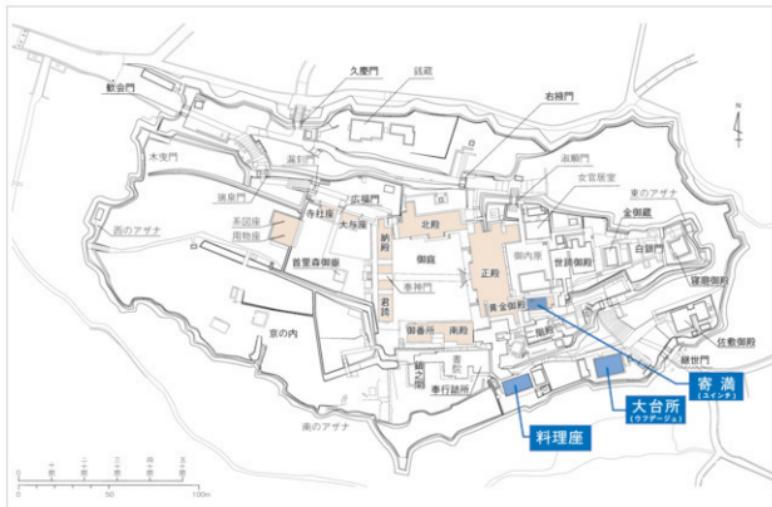
首里城にみえる食生活

首里城内にくらしていた人々は、どのような物を食べていたのでしょうか。

発掘調査では、石器や土器、陶磁器などの人工遺物とともに、当時の食べ物の痕跡となる動物の骨や歯などの残渣が大量に出土します。

これらの遺物は、国王やその家族の日常食、中国からの使節である冊封使らに供される御冠船料理のほか、首里城に住せる官女や役人、使用人たちの料理の食材として用いられたことがわかります。この調理は、国王や王族分は寄満（ユインチ）で行われ、その他を大台所（ウフデジュ）や料理席で行っていたとされています。

これらの施設で調理された料理は、交易により各地からもたらされた青磁や白磁、青花などの豪華な陶磁器や漆器類に盛りつけて食されたことでしょう。ここでは、首里城跡から出土した食料残滓から、当時の食について考えてみたいと思います。



首里城平面図

横内家資料平面図（明治初期）をトレース・加筆

首里城で食べられていたのは！

遺跡から出土する自然遺物として、ウシ、ブタ、ニワトリ、魚などの動物骨と、ハマグリやマガキガイなどの貝類を主に、ごくまれに炭化した植物の種子や穀物が出土することがあります。

この中から、首里城内の食材と思われる自然遺物について、種別ごとにわけて解説します。

動物骨：出土する動物骨は、獸骨・魚骨に分けることができ、魚骨が大半を占めています。獸骨には家畜として飼育されたブタ（イノシシ）、ウシ、ウマ、ヤギなどの哺乳類のほか、ニワトリなどの鳥類が含まれています。これらの残滓の骨の表面には、ナイフによる傷跡が残ることから、刃物により解体して調理したことがわかります。また、珍しい動物の骨として、ジュゴンやウミガメ、シカ、イヌ、ネコも出土しており、現代では食用としない動物も食べていただことがわかります。なお、首里城跡から、14・15世紀頃から17世紀頃までは牛の骨が多く出土しますが、18世紀以降はブタの骨が多く出土するようになります。

次に、魚骨の種類はブダイ（イラブチャー）やフエフキダイ（タマン）、ハタ（ミーバイ）、ハリセンボン（アバサー）など、サンゴ礁域に生息する魚がほとんどですが、シイラ（マンビカ）やカツオ（カチュー）などの外洋を回遊する大型魚もみられます。このことから近海だけでなく、遠洋で捕獲された魚も運ばれていたことがわかります。また、首里城内では宫廷料理として、大型の高級魚を好んで食べていたと思われがちですが、近年の調査ではミズン（ミジン）やスク（アイゴの稚魚）など小魚の骨も回収されており、多様な魚を食材として利用していましたことがわかっています。



食用にしていた動物の骨
(左: ウミガメ・ジュゴン 中: イヌ 右: シカ)

貝類：食用の対象としたと思われる貝には、二枚貝と巻貝があります。二枚貝はシャコガイやハマグリなどの大型の貝も出土しますが、大半はアラスジケマンガイなどの小型の貝が占めています。巻貝はヤコウガイやチョウセンサザエ、カンギクが多い傾向にあります。このうちヤコウガイは、殻口部付近に孔が開けられた状態で出土しています。これは漆器の表面を飾る螺钿細工の原料にする目的で、生きたまま海中に縄でつなぎ、養殖していた証拠と考えられています。首里城跡からは、殻とともに丸もち状の蓋も多く出土することから、城内で身を取り出し、食用にしていたことが考えられます。

種子・穀物: 野菜や海藻、穀物など植物質の遺物は土中で分解されることから、遺跡から出土することはほとんどありません。しかし、ごく稀に調理時や火災などにより、焦げて炭化した穀物や種子類が出土することがあります。また、分解の原因となるバクテリアが発生しない状況、かつ風化もしない環境においては、植物質の遺物が長期間保存されることがあります。首里城跡の調査により、泥質の土にパックされたゴミ穴から、植物の種子や穀物が出土しています。確認された種類は、食用と思われる栽培種でイネ、ムギ、ゴマ、マメ類、メロン類、トウガン、カボチャ属などがみられます。

種実類



ひとくちメモ

出土した動物骨や貝類などの自然遺物は、資料整理作業の段階で、種類ごとに整理された標本と比較しながら種類を特定する作業を行います。そして出土地ごとに集計を行うことにより、どの種類の動物が何頭、何匹分なのかを示す最小個体数を算出することができます。これらの情報と陶磁器などの年代がわかる資料の情報を組み合わせて分析を行うと、「いつの時期」に「どのような食材」を「どれだけ用いた」のか、また、その動物の生息地から、「どのような方法でどこまで獲りに行ったのか」を考える資料にすることができます。このような分析から、当時の人たちの食べ物（食材）の一端を知ることができます。



獣骨の同定作業



貝類・獣骨の標本

コラム1 貢石の出土

2007（平成19）年度に実施した首里城御内原北地区の発掘調査において、石を円形に積み上げた遺構が検出されており（写真参照）、その内部から糞石が出土しています。

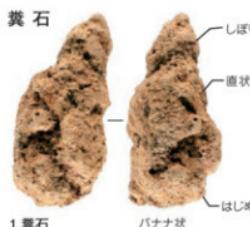
糞石とは、動物や人間の糞が化石化したものとれます。出土した当初は、やや固めの茶色い固形物でしたが、現在は乾燥して白っぽく変色しています。

糞石に関する話題として、福井県の鳥浜貝塚からは縄文時代の糞石が大量に出土しており、形状や部位を数種に分類しています。その形状として、「バナナ状」、「コロ状」、「チビ状」のものに形態分類されています。また、バナナ状のものの部位として、「はじめ」、「直状」、「しぶり」に分けることができ、首里城から出土した糞石も、この分類にあてはまります。

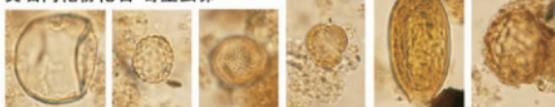
遺構内の土砂は全量回収を行い、細かい遺物を回収する目的で水洗選別を行いました。その後、糞石と思われる遺物を回収し計量したところ、乾燥重量で約3.3kgを量ることができました。そのほか、遺構内からは17世紀前半に製作された陶磁器類や動物骨、種子類も出土しています。これらのことから、当該遺構は17世紀前半のゴミを廃棄した穴で、その中に排泄物も捨てていたことが判明しました。また、遺構内の土砂は堆積の状況から、ゴミがたまると繰り返しかき出して再利用したことが考えられます。

なお糞石の一部は、微細遺物や花粉、寄生虫卵（回虫・鞭虫）のほか、イネ、アブラナ、ヨモギの花粉が検出されています。このうち回虫卵は、ヒトに寄生する種類のものである可能性があります。この結果から、出土した糞石はヒトのもので、その主は寄生虫卵に汚染された水や野菜を摂取していたことが考えられます。

このような分析から、首里城にくらした人たちの食材や、健康状態の一端をうかがうことができます。



糞石内花粉化石・寄生虫卵



円形石組み遺構（ゴミ穴・シリ遺構）

首里城を彩るうつわたち

首里城跡の発掘調査では、多種多様な陶磁器類が見つかっています。種類別に見ていくと、碗、皿、盤、鉢、擂鉢、壺、瓶、水注、杯、合子などがあります。これらの陶磁器類は、当時どのように使用されていたのでしょうか。

ここでは、首里城跡から出土したうつわがどのように使用されたのかについて解説します。

食器：陶磁器の中で特に出土量の多い碗や皿類は、食器として使用されていたと考えられます。会食の際、盤（大皿）や鉢には料理が盛り付けられ、碗や皿類に取り分けるスタイルが想定できます。また、大合子は二段構造となっており、漆器の東道盆と同様にオードブルを盛るうつわとして使用されたものと考えられます。



碗・皿（中国産青磁・白磁・染付・色絵）



大合子・盤・鉢
(中国産染付・青磁)
擂鉢（備前焼）

調理具：首里城跡や周辺の寺院跡からは、備前焼の擂鉢が出土しています。擂鉢は、食材をすり潰す際に用いた調理具です。

備前焼が琉球にもたらされた背景には、禪僧による禪院茶礼（茶の湯の作法）や茶の湯文化の導入に関わりがあることが指摘されており、日本の要素を取り入れていたことがうかがえます。



擂鉢（備前焼）

貯蔵容器：壺の中でも、黒色や褐色の釉薬がかかった褐釉陶器の壺は、器面に文様がほとんど描かれないこと、サイズが定型化されていることから、何らかの物資を収めて運搬した容器（コンテナ）と考えられます。そのほとんどが中国やタイ産の製品です。

琉球はその当時、海外諸国と交易を行っていたことが知られていますが、中でもタイとの交易においては、「香花酒」と呼ばれる酒が取引されたこと、琉球でこの酒を飲んだとされる冊封使の記録も残っています。

このように、壺類は酒などを輸入する際の容器として持ち込まれ、その後は何らかの貯蔵容器として使用されたことが考えられます。



酒類の容器に使用された陶器壺と土器壺

酒 器：宴や儀礼祭祀などで酒を飲んだり、供えたりする場で使用されたと考えられるうつわです。「美酒清香」という文字が描かれた壺（酒会壺）があります。酒を褒め称える意味があることから、酒器としての一面が考えられます。壺の酒は水注に移され、さらに杯に注ぎ入れて飲まれたと考えられます。



めいびん
梅瓶と酒会壺



瓶・水注・杯

茶 器：天目と呼ばれる黒釉のかかった碗は、抹茶を飲むためのうつわでした。首里城二階殿地区からは、532個体の天目茶碗が見つかっています。このことから、首里城でも日本と同様に抹茶を嗜んでいたことが考えられます。

その他いろいろ：その他、大花瓶や器台などのように、空間を飾る用途を持つうつわもあります。また、大合子や紅釉水注など、世界的に見ても出土例がほとんどないうつわ類については、京の内という特別な場所で見つかっていることを鑑みると、祭祀や儀式などの特別な場で用いられた可能性も考えられます。



置物・花瓶・器台（中国産青磁・染付）



青花 八宝文大合子

食

首里城で見つかったうつわ類は、緑、白、赤、青、茶など色とりどりで文様も華やかに描かれた品々がみられます。また、産地も中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本等で作られた製品が占めています。これらのことから、各国との中華貿易で栄えた琉球王国のダイナミックな胎動を感じることができます。

これらの陶磁器によって首里城の「食膳」は彩られており、来賓などを歓待する際に欠かせない重要な要素だったことでしょう。このような多種多様なうつわ類から、諸外国に対する琉球の人々のおもてなしの心を垣間見ることができます。

コラム 2

酒と茶に関する陶磁器

国の重要文化財（考古資料）に指定された首里城京の内跡出土陶磁器 518 点のうち、酒宴に関係すると考えられる製品は 177 点を数え、全体の約 3 割を占めます。

具体的には酒器として用いた杯や水注のほか、酒を貯蔵した壺や甕などが挙げられますが、特に壺類は中国やタイなどの産地別に多様なバリエーションがみられるため、それぞれの地域で生産された酒の種類やランクに関係するかもしれません。また数は多くないですが、抹茶を飲むための黒釉陶器碗（天目）も確認されています。酒や茶は現在のように日常で消費するだけでなく、賓客の接待や祭祀儀礼などに重要な役割を果たしたと思われ、遺跡からの出土状況もそれを裏付けていると考えられます。



天目（黒釉陶器碗）

コラム 3

おもてなし料理メニュー

琉球国王が代わると、中国王朝の皇帝は先代国王の葬儀「諭祭」を行うとともに、新国王の即位を認める勅書をたずさえた使節「冊封使」を琉球に派遣します。冊封使の来琉は、約500年間で23回におよび、一度に約400人の一行が半年間滞在したとされています。この冊封使の滞在中には、国王が招待する宴会「大宴」が7回催されました（七宴）。この接客料理を「御冠船料理」と呼んでいます。

この献立をみると、燕窩（ツバメの巣）、魚翅（ふかひれ）、海参（ナマコ）、乾鮓（干しアワビ）などの中国料理の高級食材がみえ、琉球には産しない食材も用いたことがわかります。

首里城跡と天界寺跡からは、この献立に関連すると思われるシカの骨が出土しています。約2万年前にリュウキュウジカが絶滅して以降、沖縄にはシカが生息していませんでした。出土したシカ骨は、各種の文献記録と骨格標本との比較から、1600年代前半に薩摩から持ち込まれたニホンジカの亞種、現在は天然記念物に指定されているケラマジカのものであることが考えられます。献立には、鹿筋（シカのアキレス腱料理）や焼鹿肉（シカ肉のスープ煮）が記載されています。

その一方で、1609年の薩摩による琉球侵入に伴い、琉球にも大和式の厨房の規定が導入されます。これにより在番奉行の接待では、日本料理の食材と手法により調理された本膳料理が供されました。また、西洋からの客人には、日替わりで日本料理と中国式の料理をふるまっています。これらの記録から近世以降の琉球では、中国と日本のふたつの流れを汲む料理形態が確立されており、ときと場合によって使い分けがされていたことがあります。そこから歴代の国王は、国の威信をかけて多くの経費と人材を用い、客人をもてなすために各地から食材を取り寄せ、調理の腕を磨いていたことが読み取れます。



ジュゴン肉のくん製〔八重山博物館蔵〕（盛本勘 撮影）

コラム 4

国王の食事

食

国王の日常食は、どのようなものだったのでしょうか。一日の食事は3食で、朝食は「アサウブンガナシ」、昼食は「ミフィルマガナシ」、夕食は「ユウブンガナシ」と称され、朝夕は一汁五菜、昼食は二汁五菜の構成でした。この調理は、御内原内の国王・王族専用の厨房である寄満（ユインチ）で行われていました。

当時の献立の一部は、首里城に仕えた庖丁（ホーチュー・料理長）の家に伝わった「御献立」を、1872（尚泰25・明治5）年に写した資料が残されています。

ここでは朝食と夕食の一例を紹介します。

朝 食（アサウブンガナシ）	夕 食（ユウブンガナシ）
• 醋をつけた魚（刺身か）、色のり	• 貝柱、おろし合わせ、す海苔
• あられ魚・若菜・シイタケ入りの汁	• むか子、花ぶしの汁
• 香の物（結びタクアン、塩もみ大根）	• 香の物（守口大根、かくあい）
• ご飯	• 引き味噌、鰯、甘露シイタケ、てがら蓮
• 煮物、キスのあぶり焼き、蒸し麩、レンコン	• 鰯、ちくわ昆布
• あいなめ、島田湯葉、糸三つ葉	• 五目凍み豆腐
• 菜のお浸しカラスザンショウがけ	• 焼き物（生鮭塩蒸し）
• 魚の串焼き	• あわびの塩蒸し、タマゴ焼き、蒲焼き
	• 茶碗蒸し
	• ご飯

この献立の内容から、王国末期の首里城では、日本料理を日常食としていたことがわかります。これらの食費は国の予算によるものと、王妃らの私費による惣菜でまかなわれていたとされています。また、料理や食器は身分により厳密にランク付けが行われ、国王の食器には沈金や箔絵が施された漆器と、中国産、本土産の陶磁器が用いられたようです。

これらの食器には、金の三つ巴紋が施された木製漆塗りの蓋がかけられ、螺鈿漆器の高膳に配して供されました。

いのり～祭祀に込めた想い～

祈

私たちς日々の暮らしの中で、何かを祈願することがあります。それは家族の健康や、旅の安全など、様々な場面で行われます。同様に、過去を生きた人々も様々な思いで、「いのる」行為を行っていたものと考えられます。

首里城内にも「京の内」をはじめ、祭祀や儀式を行ったとみられる神聖な場所が複数あります。当時、「いのる」ことは国の安寧を願う政治的行為の一部として、重要視されていました。

ここでは、文献に残る「いのり」の記録や、発掘調査からみえる「いのり」の痕跡について取り上げます。

「いのり」に使われていたのは

首里城「京の内」は、「神が降臨する聖域」であり、首里城内郭の南西側に位置する祭祀や儀式を行う空間です。「京の内」では国王の即位決定をはじめ、国王への託宣など、琉球王国の重要な祭祀や儀式が行われたと考えられています。その「京の内」の倉庫跡から出土した陶磁器や金属製品、ガラス玉などは、これらの祭祀や儀式で使用された遺物として考えることもできます。

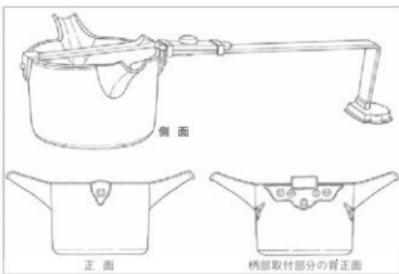


上段左：鏡 上段右：長柄付口銘子の容器

下段左：鼎型香炉把手 下段：香炉胴部

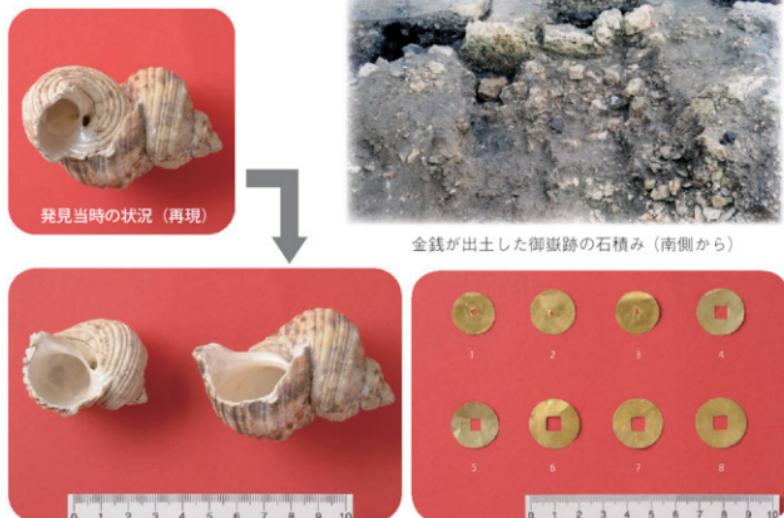
金属製品の中でも、祭祀関係の道具として考えられるのが、鏡、香炉、鈴、柄杓（長柄付片口銚子）などです。その他、錢貨が埋納されている例もあります。このうち、柄杓は文献資料から用途が推測されるものとして重要です。

この製品は沖縄県の遺跡から初めて出土しました。「おもろさうし」卷6の「うちいでは大き御まへが節」330番に「玉御柄杓」の表記があり、この御柄杓と、京の内跡出土品の長柄付片口銚子が同一かは判然としませんが、柄杓は単なる水汲みや酒を入れる道具ではなく、宗教的な意味を持った特殊な靈力を有するものとして信じられていたことが考えられます。



長柄付片口銚子の容器を推定復元（作図：金城亀信）

また、京の内地区の御嶽跡（祭祀や儀式などをを行う拝所）からは、チョウセンサザエの中に納められた8枚の金錢が見つかりました。金錢の出土例は稀で、首里城以外では斎場御嶽など首里王府と密接に関連した御嶽から出土しています。これらのことより、当時の琉球王国が御嶽を創建する際に、土地の神へ地鎮を兼ねて埋納したものと考えられます。この埋納錢を「厭勝錢」といいます。



コラム 5

ぶんけん

文献や発掘調査からみえる首里城の「いのり」

18世紀初頭の文献によると、かつて首里城内には10カ所の御嶽があったとされています。城内十嶽とも称されるこれらの御嶽群のうち、現時点で7～8カ所については場所がほぼ特定できる状況となっています。特に近年の発掘調査では、神が降臨する標識である「イビ」に見立てた巨岩と、それを囲む石積みで構成された遺構が複数検出されており、石積みの内側からは錢貨や厭勝銭などの遺物も出土しています。これらの成果と文献史料の内容を検討していくことによって、首里城内における「いのり」の様相が明らかになるものと考えられます。

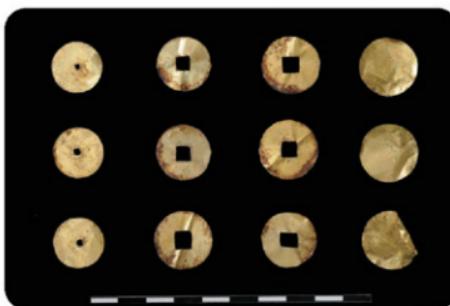
はいのりの様子
繼世門北地区検出の拝所遺構

コラム 6

厭勝銭

厭勝銭とは災いを避け、幸運を願うために用いられた護符の一種で、錢貨の形をしていますが実際に流通した銭ではありません。中国の前漢～新代に起源を持ち、日本では室町～江戸時代に流行したとされています。

沖縄ではこれまで園比屋武御嶽・斎場御嶽・首里城跡の3カ所から、直径約2cm・厚さ約0.1mmを測る金製の厭勝銭が合計37枚出土しています。これらの用途は、いずれも琉球王府時代に重要な祭祀を行っていた場所からの発見という共通点があるため、国家の安泰を祈願する祭祀に伴って埋納された可能性が高いと考えられます。



繼世門北地区出土の金製厭勝銭

首里城の内閣連年表

重要文化財指定基準

◎ 考古資料の部

重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 二 銅鐸、銅劍、銅斧その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 四 宮殿、官衙・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

*○ 国宝及び重要文化財指定基準、(中略)・基準(抄)(昭和 26 年 5 月 10 日文化財保護委員会 告示第 2 号)〔最終改正〕平成 8 年 10 月 26 日文部省告示第 185 号より一部抜粋。

重要文化財指定の名称と指定理由

(考古資料の部)

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点

附 一、金属製品 一括

附 一、ガラス玉 一括

所 有 者：沖縄県(沖縄県立埋蔵文化財センター保管)

(庁保美第 3 の 3 号平成 12 年 6 月 27 日付け「重要文化財の指定について」

文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成)

説 明 文： 尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は靈力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽は琉球王国の最高女神である闇得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成 6 ~ 7 年度に実施され、約 2000 平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順 3 年(1459)に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね 14 世紀中頃から 15 世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に 2 点と景德鎮窯跡出土の破片 1 点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁錦」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が國中に充満する」(訳文の趣旨)とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鍔等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

(文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成 12 年 6 月号より抜粋)

* 官報告示：平成 12 年 6 月 27 日付け文部省告示第 120 号

* 文化財保護法(昭和 25 年法律第 214 号)第 27 条第 1 項の規定により、平成 12 年 6 月 27 日付けで重要文化財に指定。

重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

重要文化財 考古資料の部			
指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器			518点
附 一、金属製品		一括	
附 一、ガラス玉		一括	

重要文化財 陶磁器内訳

種類	器種:点数	器種:点数	器種:点数
青磁(289点)	碗 103	皿 117	盤 32
	壺 20	大花瓶 2	馬上杯 1
	水注 3	瓶 5	香炉 3
	水滴 1	花盆台 1	鉢 1
白磁(33点)	碗 14	皿 11	杯 2
	水注 1	壺 1	瓶 4
元染付(2点)	馬上杯 1	大合子 1	
明染付(58点)	碗 32	皿 4	杯 3
	鉢 1	瓶 14	壺 4
色絵(3点)	碗 2	皿 1	
紅釉(1点)	水注 1		
瑠璃釉(2点)	碗 1	瓶 1	
褐釉磁器(1点)	碗 1		
褐釉陶器(35点)	壺 30	水注 1	鉢 1
	壺蓋 1	特殊壺 1	
	蓋 1		
白釉陶器(3点)	壺 2	水注 1	
タイ産褐釉陶器(55点)	壺 55		
タイ産練土器(22点)	蓋 18	壺 4	
ベトナム陶器(3点)	瓶 1	水注 2	
備前ほか(本土産)(6点)	播鉢 1	かめ甕 3	壺 2
瓦質土器(沖縄産)(5点)	蓋 5		
合計		518点	

(引用・参考文献)

- 田島清郷 1966 「琉球料理」月刊沖縄社
- 千浦美智子 1979 「糞石」鳥浜貝塚－繩文前期を主とする低湿地遺跡の調査－』福井県教育委員会
- 金城須美子 1993 「沖縄の食文化－料理文化の特徴と系譜」「海洋文化論」環中国海の民俗と文化第1巻 概風社
- 真栄平房敬 1997 「国王の日常」「首里城物語」ひるぎ社
- 沖縄県教育委員会 1998 「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－」沖縄県文化財調査報告書 第132集 沖縄県教育委員会
- 西谷大 1998 「貨幣の誕生－宝貝と厭勝錢」「お金の不思議 貨幣の歴史学」山川出版社
- 池宮正治 2001 「伝・尚泰王の御献立」「首里城研究」6号 首里城研究会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 「特別企画展 首里城京の内蔵－貿易陶磁からみた大交易時代－」沖縄県立埋蔵文化財センター
- 「松山御殿物語」刊行会編 2002 「松山御殿物語」ボーダーインク
- 城間恒宏 2002 「ケラマジカの由来に関する若干の考察」「沖縄史料編集紀要」第27号 沖縄県教育委員会
- 新垣力 2005 「首里城出土の茶道具にみる琉球の製茶」「淡交」No.728 淡交社
- 池田榮史 2006 「沖縄出土の備前焼」「備前市歴史民俗資料館紀要」8（備前歴史フォーラム資料集）
- 池田榮史 2007 「沖縄出土の備前焼・補遺」「南島考古」第26号 沖縄考古学会
- 菅原広史 2009 「首里城および周辺遺跡出土のシカに関する考察」「沖縄埋文研究」第6号 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 仲座久宜 2009 「シーリ遺構から見る御内原のくらし－平成19年度首里城跡御内原北地区発掘調査から－」「沖縄埋文研究」第6号 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2009 「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010 「首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011 「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第56集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011 「重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展 首里城“もの”がたり」沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第62集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 「中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）－」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 「国指定重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展」沖縄県立埋蔵文化財センター
- 城間恒宝 2013 「琉球におけるシカの利用と移入の目的について（補遺）」「沖縄史料編集紀要」第36号 沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 「首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（2）－」沖縄県立埋蔵文化財センター
- 伊從勉 2014 「首里グスクの御嶽と祭場」「琉球 交叉する歴史と文化」勉誠出版
- 盛本勲 2014 「沖縄のジユゴン－民族考古学からの視座」榕樹書林
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2014 「重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展～甦る、異国からの宝物～」沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター
平成 27 年度重要文化財公開 首里城の内跡出土品展
「発見！首里城の食といのり」
発行日：平成 28（2016）年 2 月 23 日

編集・発行：沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754
HP <http://www.prefokinawa.jp/edu>



沖縄県立埋蔵文化財センター

〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL : 098-835-8751

FAX : 098-835-8754

入所無料

【開所時間】午前 9 時～午後 5 時（入所は午後 4 時 30 分まで）

【休 所 日】毎週月曜日、国民の祝日（こどもの日、文化の日を除く）

年末年始、慰靈の日（6 月 23 日）

※月曜日が祝日となつた時は、翌日の火曜日も休所